

## 論文審査結果の要旨

報告番号	修 第 137/ 号	氏 名	村重 美佳
論文審査担当者	主査 大屋 晴子 副査 増山 英理子 副査 上條 史子		
<p>論文題名：Dubowitz 神経学的発達評価法を用いた極・超低出生体重児の入院中の運動発達と体重変化</p> <p>論文審査の要旨</p> <p>近年の新生児医療の進歩による、低出生体重児の生存率が上昇し、極低出生体重児、超低出生体重児は増加傾向にある。出生後の新生児集中治療室における管理が、その後の成長・発達に影響を及ぼすことが示されているが、新生児集中治療室入院期間中のリハビリテーションの運動発達と体重変化の評価に関する研究は少ない。低出生体重児は、在胎週数が少ないほど、全身の筋緊張が低く、重力に抗することができないことによる不良肢位を示すことが多い。低出生体重児の姿勢が神経学的後障害の問題を呈することから、特に後障害のリスクが考えられる極・超低出生体重児を対象に Dubowitz 神経学的評価法を用いて修正 37 週から修正 42 週の間で評価変化と体重変化を後方視的に調査し、新生児集中治療期間における早期介入を目的としたリハビリテーションを検討した。</p> <p>2021 年 2 月から 2022 年 2 月の期間に入院した低出生体重児 22 例を対象に Dubowitz 神経学的発達評価法の 6 つのカテゴリ、合計点、体重の変化を検討結果、評価期間(3 週間)で Dubowitz の合計点と体重は増加した。Dubowitz の 6 つのカテゴリの「筋緊張」「反応と行動」の合計点に有意差が認められ、スコアが上昇した。極・超低出生体重児に対する積極的なポジショニング介入が有用であることが示唆している。また改善が認められなかった項目の介入方法の課題を示している。</p> <p>上記のことから本論文は本学大学院学位論文(修士)審査基準を満たしており、学位論文に値すると判断した。</p>			

(主査が記載)